



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ロシア・ソヴェトの東漸：シベリアの問題（その三）
Author(s)	山本, 敏; Yamamoto, Satoshi
Citation	スラヴ研究, 16, 145-160
Issue Date	1972
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5020
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112947.pdf



ロシア・ソヴェトの東漸

——シベリアの問題—— (その三)

山 本 敏

9.

われわれがさきに提起した問題、すなわち、ロシア・ソヴェト経済力の東漸方向は何によるものであるのか。ヨーロッパ・ロシアに対してシベリアには、自律的な発展の可能性があるのか、また、そのような可能性を裏付ける事実があったのか。

この十数年の間に19世紀と20世紀の間のシベリアにおける農業の発展に関する諸問題について、主として地元の研究者たちによって、数多くの著作が発刊された。その一部を列挙してみると次のようなものがある。これらによって、資本主義侵透期における農業発展の特異の型がシベリアにあったとすることができるであろうか。

Р. А. Гридасов. К характеристике колониальной прошлой Сибири. Вопросы экономики и планирования. Зап. Саратов. планового ин-та, вып. VI, Саратов, 1940.

Н. Е. Рогозин. Влияние сибирской железной дороги на экономическое развитие Западной Сибири в начале XX века. Уч. зап. БГУ им. В. И. Ленина, вып. 16, сер. ист. Минск, 1953.

М. М. Шорников. Экономика Западной Сибири накануне социалистической революции. Сб. Большевики Западной Сибири в период подготовки и проведения социалистической революции. Новосибирск, 1957.

А. А. Храмов. К вопросы о путях развития капитализма в сельском хозяйстве Сибири накануне великой Октябрьской социалистической революции. Докл. и сообщ. науч. конф. по истории Сибири и Дальнего Востока. Секция истории и этнографии Советского периода. Томск, 1960.

Л. Ф. Скляр. Столыпинское землеустройство в Сибири. Науч. докл. высш. школы. Исторические науки. 1958. № 4.

また、学位論文としてこの問題を取扱ったものに次のようなものがある。

А. К. Захарова. Развитие капитализма в сельском хозяйстве Западной Сибири. Пореформенный период. Кан. дисс. М., 1952.

Е. И. Соловьева. Переселение крестьян в Томскую губернию в период столыпинской аграрной реформы. Канд. дисс. Томск, 1956.

М. К. Ветошкин. Очерки по истории большевистских организаций и революционного движения в Сибири. 1898-1907. гг. М., 1953.

его же. Революция 1905-1907 гг. в Сибири и на Дальнем Востоке. В кн.

Революция 1905–1907 гг. в национальных районах России. М. 1955.

М. С. Алферов. Крестьянство Сибири в 1917 году. Новосибирск, 1958.

А. А. Храмов. Крестьянское движение в Томской губернии в 1910–1914 годах. В кн. Революционное движение в Сибири и на Дальнем Востоке. Вып. 1. Томск, 1960.

ガリュースキン氏は、これらについて次のように批評している¹⁾。

「これらの諸著作には、シベリアの農業における資本主義の特徴とシベリアの農業における階級闘争の性格が述べられているが、残念なことに、それらは夫々の地方の農業における資本主義の特性についてだけ述べたものである。従って、これらの著作では、シベリヤ農村における経済的なすべての要素が同一線上において明らかにされていない。つまり、全体としてシベリヤの農業における資本主義を論じているものは一つもない。

これらに共通している最も大きな誤りは、シベリアの農村における封建的な残存物と小商品経済の過小評価である。これらの著作の中では、しばしば、シベリアには地主経営が存在しなかったということで封建的な残存物がないと説明されている。」たしかにシベリアには地主的土地所有は殆んどなかったし、地主的土地所有に結びついた地主的封建制の残存物は殆んどなかった。しかしながら、ガリュースキン氏が主張するように、1861年の改革間近になると、シベリアには国家的封建体制が極めて複雑にからまり合っていて、その残りかすは1917年に到るまで存続した。

何人かの研究者は、シベリアにおける地主的封建制と国家的封建制の差異をとりあげるまでに到っていないが、それは国家による封建体制を過小評価しているからである。しばしば、1905–1907年革命前後のシベリアにおける農業問題をまったくとり上げないでいるのはその結果であろう。封建的な残存物を否定し、広汎に発展した小商品生産、鉄道から離れた家父長制的経営、さまざまな形態の *Кабала*、商業的＝投機的な資本の広汎な侵透等々に注目せず、そのことによってこれらの研究者たちは、シベリア農村の資本主義的発展の特徴を正しく把握し得ないでいる。このような方法論上の欠陥によって、それぞれのデータが全シベリア経済の中でもつ比重を規定し、それが全シベリア経済の中で果たす役割を考えることを不可能にしている。しかし一体「全シベリア経済」と呼ぶものがあつたのかどうか。このことは問題である。それはともかくとして、このような研究方法を以てしては、シベリアの企業家的農業を目指す資本主義発展の道を確認するのに充分だとは決して言うことができない。

農民改革以後のシベリアの農業における資本主義の発展には、発展の二つの型の双方が明らかに見られる。

プロシヤ型の発展の道を可能とする経済的基礎となっていたのは、シベリアの土地が皇室と国庫による封建的な土地所有の下にあったことであり、その政治的基盤となっていたのは、国内でのツァーリと地主の権力であった。

1) Л.М. Горюшкин, Социально-экономические предпосылки социалистической революции в Сибирской деревне, Изд. Сибирского отделения АН СССР, Новосибирск, 1962. стр. 3–4.

西シベリアにおいて封建制の残存物が護持されていたことから、プロシヤ型の道による発展の可能性があったと行うことができよう。それらは封建的土地所有に於いても、共同体による土地利用の中でも温存されていたし、物納や賃金の現物支払など、また商業的・投機的資本を増大させたり、収支の配当を通じて抜き難いものとなっていた。

ツァーリと地主が、種々雑多な義務負担・賃貸料、農産物搬出に対する高率の税金等によってシベリア農民からの収奪を行っていたことも事実である。このような形で封建的残滓はシベリアの資本主義的発展の上におおいかぶさっていたのである。

皇室の土地所有権と地主的支配、これが小作料その他の義務負担のとり立てという方法での半封建的農民搾取の基礎となっていた。国家によってとり立てられるこれらの義務負担や税は、換言すれば、封建地代の形をかえたものであった。シベリアの農村では、この封建地代が3つの形態のすべてをとって残っていた。すなわち、(1) 道路・水その他若干の役務負担という形での労働地代、(2) 軍隊及び流刑者の食糧負担という形での生産物地代、(3) 小作料・地方税等の貨幣地代、である。すなわち、西シベリアにおいては、1917年まで地代の圧倒的な部分は封建地代であり、それが資本主義地代とからみ合っていた。

貨幣地代も、完全に資本主義的なものではなかった。農奴制の跡が生々しく残っていたシベリアにおいては、資本主義的地代そのものが本来あるべきものにくらべてより高いものになっていた。

農耕は雇傭労働や奴隷的に隷属した農民の手によって行われていた。すなわち、農村ブルジョワジーや富裕な農民の手中にあって、資本主義的なやり方で利用されていた9デシャチーナ以上の播種面積をもつ分与地や貸与地は、西シベリアの農民層の利用していた全土地の37%²⁾にすぎなかった。

ツァーリ政府は西シベリアの農業にプロシヤ型進化の道をとらせようとあらゆる策を講じていたので、1861年の改革もストルイピンの改革もシベリアの農民にとってきわめて苦しいものであった。全資本主義期間中、西シベリアの農民たちが志向したのは、資本主義的進化の企業家的農業の道であった。

西シベリアの農民の革命的闘争について紹介したものには次の諸著がある。

Т. П. Прудоникова. Крестьянское движение в Томской губернии во второй половине XIX века. Изд. Новосибирского отдела географ. об-ва СССР, вып. 4, Новосиб. 1958.

Е. И. Соловьева. Классовая борьба крестьянства Томской губернии в период проведения столыпинской аграрной реформы, там же :

Г. А. Титов. Из истории революционного и демократического движения в Томской и Енисейской губерниях в 1910–1911 гг. там же.

Его же. Подъем революционной борьбе трудящихся в Томской и Енисейской губерниях в 1912–1914 гг. там же.

2) Сборник статистических сведений об экономическом положении переселенцев в Сибири. вып. 11. Спб. 1912. Табл. III, стр. 124, 126, 130, 132; вып. III, Спб., 1912, табл. III, стр. 154, 156; вып. IV, Спб., 1912, Т. III, стр. 110, 112; вып. I, Томск, 1913, стр. 62, 91, 95によりガリョーシキン氏が算出した数字。См. там же.

これらはトムスク県に限った資料であるが、ここは国家と国庫が土地を所有していた地方であり、移住者が最も多く流れ込んできて、農村に資本主義的諸関係が発展したところである。それ故、この農民運動には資本主義と対決しようとする農民運動の基本的なかたちが見られる。

農奴制的な土地制度に強く反対し、1913年にはトムスク県だけで113村に農民蜂起が行われた。国有地・皇室領林の自由伐採を主張して1910年に10万件の自由伐採が行われ、その額は80万ルーブリに達した。1908-1912の5年間にアルタイ県でも241,567件、1,131,716ルーブリに上った。1906から1911年までの間に、アジア・ロシアで革命的な農民蜂起が300回も起っている。1917年の2月-10月の間にそれは最高潮となった。

一方、アメリカ型の道によるシベリヤ農業の資本主義的發展はどうであったか。もちろん、それがなかったわけではない。否、むしろヨーロッパ・ロシアにおけるよりも典型的な形で行われた。もちろん、それは富農経営に於てであるが、例えば、オムスクとペテロパブロフスクの間で行なわれていた細毛の羊を飼養する経営がその代表である。クラークや企業家たちによる27の経営で5万頭の羊を飼っていたという数字などがある³⁾。富農関係の企業にはこの他数多の例があるが、最も典型的な形であられた企業家的農業の例は、急速に伸びてきた製酪業であった。言うまでもなく、シベリアにおいてこのようにして登場した企業家的農業には、専制の側からの圧力が加えられた。

ガリューシキン氏によると、資本主義發展のプロシヤ型かアメリカ型かを論ずるのは資本主義の發展段階と無関係ではない⁴⁾。すなわち、資本主義の發展水準が異なる地域の問題を同列に論ずることはできない。例えば、鉄道から離れたところと鉄道に近くて市場関係が発展したところでは、發展の型にも差異の生ずるのは当然である。しかし、シベリアにおける農業の資本主義的發展の中では、ブルジョア的進化の場がなかったということから、直ちに、例えばペ・イ・マラヒーノフ氏が言うように、シベリアの農業に於てはプロシヤ型の進化があったとするわけには行かない。このことは、ア・エム・アンフィーモフ氏も指摘する⁵⁾。つまり、プロシヤ型か然らずんばアメリカ型か、という二者択一的なやり方は、具体的な問題についてはとれない⁶⁾。

ここで、資本主義發展期のシベリヤ農村の構造変化を示す事例をとり上げてみよう。イルクーツク県の農民経営及び開拓民経営の群別表⁷⁾から、次の数字を引出すことができ

3) Т.М. Головачев. Экономическая география Сибири, М. 1914, стр. 48.

4) И.М. Разгон氏はЛ.М. Горюшкин氏の著作の序文の中で、Горюшкин氏の仕事はシベリアの農業と農民層の状態を資本主義發展の水準ならびに農村におけるブルジョア民主主義革命及び社会主義發生の前提という見地から研究したものである、と述べている。Л.М. Горюшкин, Сибирское крестьянство на рубеже двух веков, Изд. "Наука", Новосибирск, 1967, стр. 3.

5) А.М. Анфимов, Ленин и проблемы аграрного капитализма, "История СССР", 1969, №4, стр. 15.

6) シベリア農業の資本主義發展の型についてのマラヒーノフ氏とガリューシキン氏との間の論争はまだ当分の間進行形のままである。残念ながら直接資料をもたないわれわれは、しばらくその結果を見まもるしかない。

7) «Материалы по исследованию землепользования и хозяйственного быта сельского населения Иркутской и Енисейской губерний» т. III, Иркутск, 1893, стр. 730 и сл.

る⁸⁾。

馬をもたないか馬1-2頭しかもたない下級の農家は、農家総戸数の39.4%で人口の24%を占めているが、全耕地のわずか6.2%と家畜総頭数の7.1%をもつにすぎなかった。馬5頭以上をもつ農家は戸数で36.4%、人口で51.2%を占めているが、所持する耕地と家畜は、それぞれ73%、74.5%と圧倒的な数字を示している。また、馬5-9頭をもつ農家と馬を10頭以上をもつ農家（何故かこの2つのグループの夫々の数字は算出されていない）は、1戸あたり15-36デシャチーナの耕地をもち、賃労働を大幅に利用している。これに対して、最下層のグループ、すなわち、耕地をもつ農家の20%、2-3デシャチーナの耕地をもつ農家の59%が賃労働を提供していた。すなわち、明らかに両極分解が行われていた。

しかし、土地の貸借関係については、富裕な農民によって借地が集積されるという通則がここには見られない。これは明らかに、農民改革以後のロシアの農業発展の中での珍しい例外である⁹⁾。それはシベリアには「義務的で、均等な、分与地がなく、私的土地所有が作り出されていない」ということであった¹⁰⁾。すなわち、富裕な農民は土地を購入するのでもなく、借地するのでもなく、ただそれを占拠していたのである。

エニセイ県に於いては、古くから住んでいる農民がもつ軟耕地424,624デシャチーナの中417,086デシャチーナは「占拠した父祖伝来の土地」であり、資料に上っている686デシャチーナの「借地」（「貸地」は2,639デシャチーナ、若干の総計上の狂いがある）は、「占拠された土地」の1%にもならない¹¹⁾。したがって、県全体の経済に殆んど全く影響を与えていない。

たしかにロシア（この場合はヨーロッパ・ロシア）における資本主義の発展を論ずる場合、レーニンの言う通り、このような「例外」は研究に値しないものであった。しかし、反対に、シベリア乃至一般に少数民族地区の自律的な発展を考える場合には、これは単なる「例外」ではない。残念ながら、それを「例外」でないものとして論ずるだけの資料を今は持合せないが、論議に値するものと考えられる。

もちろん、農民改革以後のロシア資本主義の発展の影響と、シベリアにおける人口の増加に伴い、19世紀後半のシベリアにおける営農方式は変化してきた。具体的には、三圃制から多圃制輪作体系への移行であり、商品作物播種面積の割合の著るしい増大である。ただ、この期に及んでもまだ、ロシアにおける施肥技術は全く低迷していたので、西ヨーロッパにおけるような典型的な資本制農業への移行は見られなかったし、その速度も緩慢であった。さらに、人為的な障害もあった。それは通称「チェリャビンスク関税障害」と呼ばれている高率高額の移入税が、シベリアからウラルを越えてヨーロッパ・ロシアに流

8) Ленин, Соб. соч. Изд. 4, т. 3, стр. 96-97 (邦訳大月版110頁)。

9) レーニンによると、「唯一の」例外であるとされているが、辺境の少数民族地区では、可成り見られた事実であると思われる。

10) 残念ながら、このことを直ちに「自由なる返境」の存在に結びつけるわけには行かないであろう。

11) 前記 «Материалы...» IV-1, 序編5ページ。Ленин, там же.

入する産物に課せられたことである¹²⁾。

それにもかかわらず、シベリアの農業にはシベリア向きの重くてじょうぶな農機具が入り、今世紀のはじめになると、その販売店の数も西シベリアだけで767店を数えるほどになった。それらの中には、個人経営のもの外に移民委員会や協同組合経営のものが多かった。何れにせよ、このことだけでもシベリア農業の発展を証することが出来る¹³⁾。

以上われわれはシベリアにおける資本主義発展期の農業について、その発展型についての論争とシベリアにおける農民層分解の事例を紹介したが、その中からロシア資本主義の一般法則から別の、シベリア農業に個有の「例外」を例証することはできなかった。ここでもまた、前述のわれわれの課題と提言は当面留保せざるを得ない。

10.

ここでわれわれは新しい時代の動きに眼を転じて、現在進行中のシベリア開発の問題に焦点をしばり、その過去と将来の見透しの中から、シベリアに個有の自律的な活力の在りかを求めてみたい。

ウラル山系から東に東西7000キ、南北3500キにわたる広大な地域、そのシベリアは一言で言えば無尽蔵の宝庫である。その豊富な自然の富については、すでに18世紀に「ロシアの国力はシベリアによって増大するであろう。」と言ったミハイル＝ロモノーソフ(1711-1765)の有名な言葉がある。ロモノーソフがこのように述べた頃のシベリアにあったのは、人跡未踏のタイガ、沼沢地、酷寒と吹雪の無人の土地であり、その豊富な自然の富は正に絵に画いた餅にすぎなかった。その頃のロシアの技術を以てしては、これを人間のために活用することなど全く考えも及ばなかったことである。このことは19世紀の中葉になって、アレクサンドル・ゲルツェンも強く指摘している。農民改革前後と今世紀に入ってストルイピン改革の時期に、シベリアへの移民が盛んに行われたが、しかしそれはシベリアの自然資源を社会のために活用させるというよりも、ヨーロッパ・ロシアに於ける行詰った停滞からの活路を東方に求めたと言うものであろう¹⁴⁾。

10月革命後、早くも1918年4月28日に、プラウダおよびイズベスチャに発表した「ソビエト権力の当面の任務」と題する論文のなかでレーニンは、労働生産性を高めるための大工業の物質的基礎を確保する必要から、西シベリアの石炭・ウラルの鉄鉱石・シベリ

12) このロシアのヨーロッパ部分とアジア部分との間にあった関税壁は、20世紀に入っても継続し、例えば、1911-13年度における茶の移出入は、ヨーロッパ側から1,624,000ブード、アジア側から554,000ブードで、その関税はヨーロッパ国境1ブード78カペイカ4分の3、アジア国境63カペイカ4分の3、平均71カペイカ4分の1であった。満鉄調査部「露国農民の課税及其他負担重度の研究」昭和2年、大阪毎日新聞社 p.17。しかし、シベリアの農業における資本主義的諸関係の発展とともに1911年8月1日からこの関税も40%低減され、翌1912年8月12日からは、さらに30%低減し、1913年には全廃された。Л. М. Горюшкин, Социально-экономические предпосылки социалистической революции в сибирской деревне, Изд. сибирское отделение АН СССР, 1962, стр. 125.

13) 以下、個々の作物や家畜については、池田博行、シベリヤ経済史、1968、アジア経済研究所、pp. 88-93 参照。

14) 増田富寿、ロシア農村の近代化過程、1962 御茶の水書房、pp. 155-165 参照。

ア、極東地方にまたがる膨大な森林資源を当面の開発目標として挙げている¹⁵⁾。成立後間もない若いソビエト政権にはその目標を事業として軌道に乗せるだけの余力はなかったし、シベリア地域には「極東緩衝国家」の存在をすら許さざるを得なかったが、しかし、その構想は1920年にロシア国家電化計画ゴエルロ・プランとして発表された。当時のソビエトにはどう考えてみても、このゴエルロ・プランを具体的な計画として実行するだけの技術はなかった。レーニンのこのゴエルロ・プランについて、イギリスの評論家 H. G. ウェルズは、「レーニンはクレムリの夢想家」と呼んだが、正にそれは当時のロシアにとっては夢のような計画であった。その後、迂路曲折はあったが、ともあれこのゴエルロ・プランが今日まで続けて来た9次に及ぶ5カ年計画の基盤になっている。それが単なる形式的な意味しかもたつていないのかどうか、つまり看板としてのみ「レーニンの計画」が用いられているのかどうか、ここではそのことについて論じない。また、このゴエルロ計画を打出したことの中で、レーニン個人がどれだけの役割を果たしていたか、それもここでの主題ではない。何れにせよ、このゴエルロ・プランの基礎にあった「シベリア資源」へのソ連の経済計画の傾斜は、その後、数次にわたって行われてきた5カ年計画の中で、経済の東進という総路線が漸次はっきりとした形をとって頭を上げてきたのである。すなわち、ソ連経済の基幹となるべき電力と重工業の中心基地をシベリアに創設するということである。はじめに発表されたゴエルロ・プランの中で建設を予定された発電所の数は30の多きに上り、その建設予定地も国の全域にまたがるものであった。この計画の一環として、1926年にノニコラエスク（現在のノボシビルスク）に建てられたシベリア最初の発電所の出力がわずかに1000キロワットにすぎなかったことは、今日建設されている発電所と比較して隔世の感がある。

第16回の党大会で承認された1930年5月15日付けソ連共産党中央委員会の決定には次のように述べられている。すなわち、「今後、国の工業化は、ただ一つの南部の石炭、製鉄基地にだけ頼っているわけには行かない。急速に工業化を進めるために絶対的な条件となっているのは、ウラルとシベリアにあるきわめて豊富な石炭と鉄鉱床を用いて、ソ連第二の石炭製鉄センターを東部に創設することである。」かくて、ウラルの鉄鉱石とクズバス炭田の石炭を基盤とするソ連第二の石炭・製鉄基地、ウラル＝クズネック・コンビナートの建設が第1次5カ年計画の最も重要な課題としてとりあげられたのである。そして早くも第1次5カ年計画期間（1928-1932）に、マグニトゴルスクとクズネックの2カ所に製鉄所が操業開始している。また、クズバスには25の炭鉱が新たに開設された。ウラル＝クズネックの石炭、製鉄基地の建設は、第2次5カ年計画期間（1933-1937）に完了し、1937年にクズネック製鉄所で生産した銑鉄は150万トン、粗鋼が150万トンであった。また、この年のシベリア地区の石炭生産高は、ソ連全国の生産高の20%に達した。

このコンビナートの創設を出発点として、ソ連経済の東漸が開始されたことは前述の通りである。また、開発の手は極北地方にもひろげられ、1932年にはコリマ川上流地方の金鉱採掘が開始され、さらに、1935年には北氷洋定期航路が運行を開始している。さら

15) Ленин, Соб. соч. Изд. 4, т. 27, стр. 228 (邦訳 260 ページ)。尤も、これらの言葉は、同名の論文草稿 (там же, стр. 176-192, 1918年3月28日口述) にはなかった。

に、1938年、つまり第3次5カ年計画開始直後にノリリスクのニッケル鉱山が操業を開始した。

第3次5カ年計画の途中で、ドイツ軍の侵攻により一旦5カ年計画は中止されることになる。ソ連はドイツとの戦いの最初の1年間に国の生産力の3分の1を失ってしまったが、3年目からは再び漸増カーブを画く。このような前例は世界の如何なる国の歴史にもなかったことである。奇蹟とも言えるこの事実をどのように説明すればよいのか、議論の分れるところである。一つには、それは前述の成田氏の論ずる通り、軍事戦略上の措置によるものであり、また一つには社会主義経済の生産力配置の問題であるとされる。何れにせよ、第3次までの5カ年計画によってシベリアに創設されたいくつかの工業基地が、ヒトラー・ドイツの侵攻に持ちこたえ、最後は遂にこれに勝利した原動力であったことは言うまでもない。

シベリアにある天然資源の調査、研究は、とくにソビエトが政権を得てから積極的、計画的にすすめられている。例えば、石油について言えば、科学アカデミー会員の地質学者イワン・グプキンが西シベリアの低地に大量の石油があることを予言したのは1932年であり、引続いて多数の地質調査隊が組織的に送り込まれた。調査活動は戦争によって一時中断されたが、戦後チュメニ州を中心として調査地域を毎年北へ北へと延ばし、1960年には遂にシャイム鉱床を発見するに到る。シャイム鉱床を発見するまでの科学者たちの探索物語は、文学作品としても数多く紹介されている。この調査が如何に組織的なものであったかは、その後の数年間、殆んど毎月のように石油や天然ガスの新しい鉱床が発見されたことによってわかる。この地区で本格的な採油がはじめられたのは1964年である。それから1970年までのチュメニ州の採油量は、それがシベリア開発の将来を語るがごとく、まったく驚くべきテンポで増加し続けている。すなわち、1964年、20万トン、1965年、100万トン、1967年、600万トン、そして1970年には300億 m^3 で、全ソ連の年間増加量の80%はチュメニ州からのものである。

1969年12月のソ連共産党中央委員会と閣僚会議の決定によると、第9次5カ年計画期間(1971-1975)のシベリアの原油生産高を1970年の4倍、つまり1億2000万トン以上と定めているし、さらに、1980年のシベリアの産油目標高は2億6000万トンという正に天文学的なものになっている。

言うまでもなく、このような生産高の急増は、それを生み出すだけの科学技術の進歩と無関係ではない。たとえば、1カ所から数本の傾斜した試錐を放射状に出して採油する方法、層圧を維持するために地下水を利用する方法、数ヶ所の油層から同時に別々に採油する方法などが新たに開発され、一本の油井に要する作業人員を4分の1に減らすことができた。

「ソ連科学アカデミー・シベリア支部の創設」にかんする1957年のソ連閣僚会議の決定により、現在では世界的な科学研究センターとなっているノボシビルスクのアカデムゴロドクが建設された。それはわずか10年余り以前のことである。現在科学アカデミー・シベリア支部はイルクーツク、ヤクーツク、ウラン・ウデに支部があり、またクラスノヤルスク、サムソン、チュコト半島、カムチャツカに研究所を置いている。科学アカデミーの

ロシア・ソヴェトの東漸

これらの支部を中心として、夫々の都市には大学・研究所地区の建設が大々的に行なわれているが、教育、研究機関の建設が、開発事業の最重点項目の一つになっている。このことはシベリア開発のもつ大きな特長である。

また、各種研究機関相互間に組織的な連繋があって、全体として総合研究が行われていることにも注目しなければならない。

アカデミー・シベリア支部のシンボルマークは総和記号 Σ (シグマ) であるが、それは正にシベリアにおける科学研究の在り方を表徴している。

あらゆる専門分野の研究が総合的に行われていることと同時に、それらの研究が国民経済と密接に結びついていることをも取挙げねばならない。一例として、ヤクーツクにある凍土研究所の仕事を見てみよう。永久凍土帯の地下 2000 m 以内で温度が約 0 度のところならば、1 立方メートルの水は最高 220 立方メートルまでの天然ガスを固体への化合物、即ち水和物に結合する力をもっていることを明らかにし、燃料の凝縮物とも言うべきこの資源の量が約 15 兆立方メートルもあることを調査した。

このような科学アカデミー・シベリア支部の科学者たちの国民経済との結びつきは、例えば、1964 年には研究成果を 5 日毎に 1 つ工業企業に提供し、1969 年には 2 日弱毎に 1 つという割合になるほど、益々緊密なものになっている。正に「産学協同」の典型であり、現段階のシベリア開発に於ては、「学問・研究の自由」が問題となり得る余地はまったくない。

さらに重要なことは、はじめ直接間接モスクワ、レニングラードなどの息のかかった人たちが占められていたシベリア支部の研究者たちが、今ではシベリア育ちの人たちにとって代りつつあることである。それは、とくに開発に直接かかわる調査研究を量的かつ質的に発展させるための要件の一つとなっている。

第 2 次大戦においてナチスドイツ軍の舌をまかせたのはシベリア出身の兵士たちであったが、ヨーロッパ・ロシアならばたちまちへきえきしてしまうであろうような困難な状況の下でもシベリアっ子たちは悠々と耐え抜く力をもっている。ジャン・マラビーニ氏は、「かれらは自分たちには墮落した世界主義者に見えるあのヨーロッパ・ロシアに対して不平を言い始めている。¹⁶⁾」と言っているが、たしかにシベリアっ子たちの根強い下からの突き上げが科学研究の分野だけでなく、あらゆる分野で頭を拾いあげはじめている。シベリア経済の前衛的な部分においては、このような下から突き上げの気流が満ち溢れている。一つの例証として最近 10 年間のシベリア及び極東地方の人口動態を示す数字¹⁷⁾を挙げよう。

	1959	1970	増 加 率
西シベリア	千人 11,252	千人 12,110	108
東シベリア	6,473	7,464	115
極東地方	4,834	5,780	120

注目すべきは、東に向う程人口増加率が高くなっているということである。

16) ジャン・マラビーニ、秋山正敦訳、シベリアの未来征服、昭和 44、朝日新聞社、111-112 ページ。

17) 在日ソ連大使館広報部資料により作成。

さらに今一つ、未来社会の夢を語る一つの事例を紹介したい。

北緯 69 度にあるノリスクは、ソ連が極北の開発にいとむ拠点である。今から 20 年前には、クラスノヤルスクから冬季は凍結してしまうので、夏の間 4 カ月位しか航行することができないエニセイ河をドウジンカまで船で下って、それから狭軌の鉄道でやっとたどりつけたところである。現在では飛行機で 5 時間、モスクワから毎日 6 回定期便が運行している。

この地方には、周期律表にのっている元素のうちの 25 の元素が埋蔵されており、そのうちの主としてニッケルと銅が北極圏最大の冶金基地をここにつくりだした。

ノリスクのさらに北の方、タイミル半島には龍大な量に上る粘結炭があり、その埋蔵量は 100 億トンを遙かに上廻ると言われている。調査の進むにつれて、ここにもまた大規模なコンビナートが建設されることになるであろう。

氷点下 60 度というのはこの地方では通常のことである。北極から吹きつける秒速 45 メートルのすさまじい風が、時として 2 週間ものあいだ間断なく吹きつづけるという。そのタイミル半島に今や人口 15 万人を数えるノノリスク市が存在することそれ自身が、20 世紀における人類の一つの大きな業績であると言えよう。この町を建設するに当って、先ず永久凍土の上に家を建てるが大変な仕事であった。建築技師たちは、建物の土台をつくるための度重なる試みの後、支柱を打込むに先立って、キャタピラのついた掘削機で 5～6 メートルの穴を素早く掘り、そこに蒸気ニードルと電極を装置した支柱を入れて、その廻りに生コンクリートを流し込むという方法を考え出した。このようにして立てた支柱の上に建物を乗せる。それは 5 階、6 階建のもので、中にはスチーム暖房、風呂、上下水道などがある。したがって、建物の熱を凍土に伝わらせないために、建物の底部は凍土から離して支柱に乗せる。市の公共の熱湯管は特別の鉄筋コンクリートに入れられているが、凍土が溶ける恐れがある場合には、冷風管を敷設して土を凍結させるのである。

このように、ノノリスクでは建物の土台沈下を防止することが先ず何よりも第一にしなければならぬことであった。しかし、多くの高層建築はもう 15 年間も全然沈下の徴候を見せていない。

ノノリスクの北、北緯 70 度のタルナフには非鉄金属の鉱床が発見され、そこに新しく冶金コンビナートがつくられた。また、ノノリスクの南 20 韃のハンタイカ川には、1969 年 11 月 20 日出力 34 万 kw の水力発電所が運転を開始した。もちろん、これは世界最北の発電所である。さらに、注目すべきことは、この発電所の近くに新しい実験都市スネジノゴルスクが建設されているということである。アパートの一層には、商店や学校、病院、図書館などがあり、アパートから発電所や工場へは、屋根つきの通路が続いている。冬期 2 ケ月のあいだ全く太陽光線を見ることのできないこの土地に、明るく電化され、気象コントロール装置によって零下 60 度の寒風を排除してしまった「21 世紀の都市」が出現するのもそう遠いことでないであろう。

河川用砕氷船アルクチカ号が、イルクーツク州のカチューグ造船所で建造されているが、この船には新しく考案された砕氷装置がついているということである。アルクチカ号が、オビ川やエニセイ川の航路を拡大するのもすでに日程に上っている。

ベーリング海峡を長さ 85 キロメートルにわたってせきとめるという計画案が報道されてから、もう 10 年余りにもなる。この案によると、年間 10 万立方キロメートルの温水が黒潮によって北氷洋に注がれ、その氷を溶かすだろうということである。このような案は、もちろん周到な科学的裏付けを必要とするが、毎年数千億ルーブリを寒さのために費しているソ連としては、ベーリング海峡のせき止めもそれ程大きな投資ではないと言えよう。

このような驚くべきほどのテンポでの開発の進行の中から読みとることのできるのは、ここには人間と自然がまっとうに向き合った形で開発の可能性があるとということである。

む す び

以上述べた限りでは、当初に掲げたわれわれの課題は、完全な形では解明されなかったが、問題所在の一端を明らかにした心算である。しかし、もちろん、所論は別途に展開されるべきであろう。

補遺として二つの資料を掲げる。それらは、シベリア・極東地方の経済の動向を示唆するとともに、当面する中小企業の問題、エネルギー資源の問題をかかえた日本経済とのかわり合いにも一定の指針を与えるものと思われる。

〔資料 I〕

極東地方経済計画委員会議長エヌ・イ・ニコラエフ、「極東地方の国民経済発展について」¹⁸⁾

(1) 経済地域と天然資源

極東経済地域には、ハバロフスクおよび沿海両地方、アムール、マガタン、カムチャツカおよびサハリンの諸州、ならびにヤクート自治共和国（ヤクーチャ）が含まれ、ソ連の全面積の四分の一余りを占める。

極東地方は天然資源が、地球上で最も豊かな地域の一つである。ヤクーチャには、ソ連で唯一の、技術の発展においてとくに重要な役割を演ずるダイヤモンドの埋蔵量をもっている。極東地方には非鉄金属および稀少金属の大きな埋蔵量がある。錫、螢石、鉄鉱石およびマンガン鉱石、黒鉛、動力用およびコークス用石炭、冶金用非鉄石原料、天然ガス等である。

電力工業発展の可能性は、非常に大きい。極東の燃料・エネルギー資源は、標準燃料に換算して 1,180 億トンに上り、ソ連の大経済地域の中で第 5 位を占める。ことに大きいのは水力資源で、とくにアムール水系の水資源である。アムール水系の河川の長さは、1 万 8000 キロ、毎秒 1 万 1000 立方メートルの水を海に注ぎ、その包蔵水力は、ブラーツク水力発電所の 7～8 倍の発電量をもっている。

極東地方は褐炭および石炭産地にも富み、カムチャツカではかなりの量の地熱が明らかになっている。

極東地方経済地域は、全ソ連邦の 30 % 余りの森林資源をもっている。森林資源として、紅松、エゾマツ、トドマツ、塩地、ナラ、クルミ、タモといった高価な樹種があることは、紙パルプ工業とベニヤ工業の発展を可能にしていることは、木材の多角的な加工と太平洋沿岸諸国への木材輸出高の大幅な増加のために、木材調達と木材加工を総合的に発展させる前提条件である。

極東地方の森林には、多くの毛皮獣、たとえばクロテン、カワウソ、リス、銀ギツネ、ミンク等が住

18) 1963 年 6 月 27 日、ハバロフスク鉄道大学ホールにおけるネステロフ全ソ商工会議所会頭をはじめとするソ連側経済代表団と北村ミッションとの懇談会での報告。

み、大鹿や斑鹿もいる。

極東地方の漁獲は全ソ連邦漁獲高の三分の一を占める。ニシンの約25%、サケ、マス、ヒラメの大部分がとれ、カニ漁の唯一の地域である。マグロ、サバ、カタクチイワシ、イワシなど食品として価値のある魚種や、鯨、海獣およびその他水産物の水揚げも、見通しが大きい。

極東地方の地理的位置は、太平洋沿岸諸国との連絡の便を特徴としており、このことは、輸出の増大にとってよい前提条件となっている。

(2) 産業、教育文化の発展

ソ連政府は、この豊かな地域の発展に不断の注意を払っている。

ソヴェト時代に入って、極東地方には鉄鉱、非鉄冶金、石油採掘、軽工業、機械、建設業など多くの工業部門が創設された。1965年に極東地方の工業生産高は、1913年の100倍以上となった。7ヶ年計画期間(1959~65年)には、ダイヤモンド、錫および、金の採掘工業、木材調査業および、木材加工工業、機械工業、軽工業、石炭工業、食品工業などの部門で、新しい大型企業が建設され、工業総生産高は約2倍に増加した。

極東地方には140の高等教育および中等教育機関が設置されており、約20万人が就学している。1950年には人口10万人あたりの学生、生徒数は107人であったが、1965年には340人と、3倍あまりに増加した。

住民は国の予算によって、無料の医療、教育、扶助料、年金、奨学金、定期休暇手当、サナトリウムおよび休息の家への無料および割引の旅行などの特典が与えられている。

(3) 新5ヶ年計画の課題

1966年のソ連共産党第23回大会の指令では、極東地方の経済的潜在力の急速な増強が予定されている。5年間に、そしてさらに長期間にわたって、何よりもまず、極東地方の経済の進んだ部門、豊かな天然資源を土台とする経済部門、つまり非鉄金属、鉄鋼、電力、木材加工・紙パルプ、漁業の各工業部門を急速なテンポで発展させようとして計画されている。

機械、船舶修理、石油採掘、石油精製、食品、燃料およびガスの諸工業も、大きく発展するであろう。非鉄金属、稀少金属、ダイヤモンドの採掘の急増も計画されている。一連の新しい採鉱、選鉱コンビナートおよび、化学コンビナートの建設と改造が完成するであろう。

極東地方における地元の冶金原料によって稼動するソ連の新しい製鉄基地の建設は、設計・調査を終わって実行段階に入るであろう。この製鉄基地の創設は、機械工業および船舶修理業を急速なテンポで発展させ、金属製品用の鋼材を充分供出するようになるであろう。

極東地方の国民経済発展計画では、電力工業の先行的発展が予定されている。極東地方の河川の巨大な水力資源の利用について言うと、この5ヶ年計画の終るまでにゼーヤ水力発電所の稼動開始が計画されており、イマン、ボドゴルナヤ、チェルニヤタなどの発電所の建設も設計されている。これらは単に電力供給源を増加するばかりでなく、洪水による損害を軽減させ、孤立した局地的設備から電力系統への職換をもたらすであろう。

ヤクーチャおよびマガダン州の発展途上の工業に電力を供給するために、この地域の河川の水力および天然ガスの利用を軸とする電力工業の発展が見られよう。ヴィリュイ水力発電所は、まもなく操業を開始する。

極東地方経済地域の燃料バランスでは、石炭が重要な地位を占める。沿海およびハバロフスク両地方、サハリンおよびアムール両州における石炭工業の建設と改造によって、国民経済の燃料需要を完全に満たすであろう。増大しつつある地域内石油製品およびガス需要はそのかなりの部分をサハリン州およびヤクーチャにおける石油およびガスの採掘の増加によって充たすよう計画されている。ガス鉱床の合理的利用のために、農業用肥料の生産を考慮して、オハ—コルサコフ・オハ—コムソモリスク、ヴィリュイ—ヴラジヴォストークの一連のガス・パイプラインの建設が予定されている。

建材工業と建設業の先行的発展、すなわち地場産の建材、金属および鉄筋コンクリート構造、セメント、スレート、窓ガラス、ルーフィング・ペーパー、ガラス・ブロック、外装用合板などの生産も計画されている。

(4) 農業の現状と展望

極東地方は集約的な農業生産の大きな可能性を持っている。広大な農業用地、有利な気候および、土壌の諸条件は、独自の食糧および原料基盤を急速なテンポで発展させるであろう。

この経済地域のコルホーズとソフホーズでは、米をふくむあらゆる種類の穀物、大豆、テンサイ、ジャガイモ、多くの種類の野菜と豆類、ぶどう、りんご、いちご、薬用植物が栽培されている。

畜産の発展とならんで、この地域には、毛皮獣の飼育、パント用鹿の飼養、工業用養蚕業、工業用養蜂業を発展させるための大きな潜在的可能性がある。毛皮パント（医薬用原料）、蜂蜜、蠟、朝鮮人参は重要な輸出品である。

新五ヶ年計画では、極東地方の農業は、ロシア共和国の他の経済地域にくらべてより早いテンポで発展しよう。この地域のコルホーズとソフホーズには、国家から化学肥料、農業機械が供給され、土地改良事業、主として米作用灌漑システムの建設と干拓作業のために大きな国家投資が配分される計画となっている。

これらによって、この五ヶ年間に農作物の収穫率を大幅に引き上げ、農作物と畜産品の大きな増産が可能となるであろう。

(5) 社会開発

極東地方の経済潜在力の急速な増強のための大プログラムは、住民の生活水準の引き上げ、住宅、就学前児童施設、学校および病院の建設の改善など一連の問題を解決することが予定されている。

これらの目的のために、先行五年間よりも新五ヶ年計画では、約1.8～2倍も多い投資の分配が計画されている。

(6) むすび

極東地方の現状、その経済の急速な発展は、沿岸貿易の広汎な発展のために明るい見通しをつくり出している。この沿岸貿易発展の可能性が、互恵の条件のもとで年ごとに拡張され強化されるという確信を表明させていただきたい。

〔資料 II〕

ソ連外国貿易省極東全権クゼンコ、「ソ日貿易の発展について」¹⁹⁾

ソ日間の貿易は、早い速度で発展しつつある。1958年のFOB建て3390万ルーブリが、1965年には3億260万ルーブリと約10倍に達し、ソ連では、フィンランド、イギリスに次いで第3位となった。ソ連から輸出した木材、鉄鉄、石油、石炭は日本経済の発展に重要な役割を果たしている。

(1) 新5ヶ年ソ日貿易協定について

1966年1月モスクワで調印された新5ヶ年ソ日貿易協定は、1966～70年の5ヶ年間の総額を21億ドル（ソ連の輸出10億ドル、輸入11億ドル）と見込み、1966年は3億9,000万ドル（ソ連の輸出1億9,000万ドル、輸入2億ドル）にきまった。

ソ連の対日輸出品目は、毎年の取引量として、木材360万立方メートル、石炭152～160万トン、石油および石油製品430～500万トン、鉄鉄90～100万トン、機械類（航空機を含む）1,000～1,300万ドルが主なもので、このほか鉄鉱石、非鉄金属鉱石、鉄屑、アルミニウム、白金、カリ塩、原綿、毛皮などがある。

ソ連の対日輸入品は、5ヶ年間に船舶999隻—2億6,000万ドル、機械およびプラント4億5,000万ドルが中心で、このほか鋼材5万トン、鋼管70万トンなど鉄鋼1億3,500万ドル、繊維製品1億4,000ドル、塗料・農薬・尿素など化学製品1億ドルなどである。

(2) 沿岸貿易について

沿岸貿易は、本協定品目リストにあげられていない「極東地方の特産物」と、「日本の消費物資」とのパートナー取引で、1963年2月に発足した。63年は約80万ルーブリ、64年は385万4,000ルーブリ、65年は478万5,000ルーブリを増加し、ソ連の輸出品目も、63年の16品目から65年の56品目に増加

19) 資料 I に同じ。

しており、日本からの輸入品目もふえた。しかし、われわれは現在の取引高に満足していない。

沿岸貿易を重視したソ連外国貿易省は、ナホトカに日本との沿岸貿易を専業とするダーリントルグ（極東貿易事務所）を設立、1964年1月から活動をはじめ、今までに30以上の実務的折衝を行なった。63年9月と64年4月のナホトカ、65年10月のハバロフスクにおける日本商品展、65年春の新潟・富山・舞鶴におけるソ連極東物産展、66年3月の新潟における第1回沿岸貿易合同会議は、両国の商品を相互に紹介し、両国民を接近させる大きな役割を演じた。今度のハバロフスク沿岸貿易見本市は、日本商品をさらに広く紹介し、極東地方の消費者の需要をよび起こすであろう。

新5ヶ年ソ日貿易協定における沿岸貿易の目標は、1966年に輸出入それぞれ450万ルーブリ、70年には約2倍の輸出入合計1800万ルーブリである。私は1966年の3月末の党大会で決定されたソ連邦国民経済発展5ヶ年計画の線に沿うて、極東地方を発展させるためにも、ソ日沿岸貿易を発展させなければならぬと考えている。

現在日本に輸出している極東産商品は、にしん、ミール用すけそうだら、生のすずき、冷凍えび、メソタイ、ふか、鯨肉、数の子、うに、伊谷草（寒天の原料）、屑材、蜂蜜、蜜蝋などで、日本から輸入している商品は、漁網、綱、漁夫用作業衣、繊維2次製品、メリヤス、果物、靴などである。

目下、極東地方の諸機関は輸出品目の拡大について検討している。輸出の用意があるのは、リグニン、各種の大理石屑（近い将来には大理石ブロックも）、チタン磁鉄鉱、魚の缶詰、薬草、もみの実、野生漿果汁、骨細工などである。

（3） 協同組合貿易について

協同組合貿易は、ツェントロソユーズ（ソ連邦消費組合中央会）と、日本各地の各種協同組合との貿易である。ソ日貿易協定に基づくソ連貿易公団—日本貿易商社の貿易とはっきり区別されている。ツェントロソユーズはレーニン勲章を授与された古い歴史をもつ有力な組織で、その実務機関はモスクワの全ソ協同組合貿易公団（Союз кооп. внеш. торг.）である。日本へ木材（丸太）を輸出し、日本の協同組合から繊維2次製品、漁網、ワイヤロープ、りんごなどを輸入し、年間約1,000万ドルの取引が行なわれている。

現在すでに第9次5カ年計画期となっているとき、前期のこの資料を掲げたのは、この2人の現地責任者の発言が、沿岸貿易という新しい貿易方式をソ連側が打出してきたことに直接かかわる好個の資料だからである。また、このような特異な外国貿易方式²⁰⁾を採用したことから、その対象地域の開発についてのゴスプラン委員会の考え方が推定できると思うからである。この場合、シベリア開発計画の重心は依然として西シベリアまでであり、極東地方についてはまだ独自の投資対象としていないことがわらう。

（本稿は昭和46年度文部省科学研究費の補助によるものである）

20) この方式をとっているのは、フィンランドと日本である。

Продвижение России и СССР в восточном направлении —Проблема Сибири—

ЯМАМОТО Сатоси

Основной предпосылкой для быстрого развития Сибирской экономики, кажется, является комплекс богатого естественного сырья.

В этом числе большой удельный вес имеет наличие топливно-энергетических, минерально-сырьевых и лесных ресурсов, а также наличие земельных и водных ресурсов. Несмотря на действие некоторых отрицательных факторов, наличие таких естественных ресурсов создает условия размещения новых производств и обеспечивает быстрые темпы развития производительных сил в будущем.

Промышленное развитие Советского Союза, электрификация и химизация народного хозяйства базируются на непрерывно развивающемся экономическом использовании богатых, дешевых природных источников энергии в Сибири: углей, нефти, естественного газа, торфа, горючих сланцев, гидравлической и атомной электрической энергии и других.

Автор этой статьи исследовал объективные условия, касающиеся особенностей развития социалистической экономики в Сибири и вообще в Советском Союзе. Он выяснил особенности развития Восточной части Советского Союза с большим естественными богатствами и с яркой индивидуальностью. Но, у него остается вопрос: научная трактовка роли феодального российского государства и народных масс в присоединении, заселении и хозяйственном освоении Сибири.

В период царской России уровень развития производительных сил Сибири и Дальнего Востока был слишком низок, что в значительной мере вызывалось историческими условиями формирования хозяйства в период крепостничества и капитализма.

С отмены крепостного права усиливается приток переселенцев в Сибирь. С 1861 по 1891 г. переселилось 450 тыс. человек. Кроме свободных переселенцев, в Сибирь прибывали и ссыльные.

Развитие капитализма охватывает и сельское хозяйство Сибири. Более 10 % крестьянских дворов применяли в своих хозяйствах наемную силу. Многие крестьяне, не имея ни посевов, ни лошадей, были вынуждены наниматься в работники к зажиточным, хозяйственным (кулакам) или зарабатывать за ежедневного хлеба на заводах и фабриках. Кулаки использовали тяжелое жизненное положение низкого слоя крестьянства. Размер владения земель кулаков рос быстрыми темпами. Некоторые из них имели 300 десятин земли и держали по несколько десятков голов крупного скота и лошадей. Такие кланки мало отличались от помещиков.

В таких условиях сельского хозяйства Сибири была возможность развития капитализма в американской типе. От этого, однако, автор не может отметить особенность развития капитализма в Сибири по конкретным мерам. История Сибири органически связана с историей всей территории России.

После Октябрьской революции социалистический общественный строй создает объективные условия для быстрого развития народного хозяйства в Сибири.

Развитие производительных сил в Сибири шло быстрыми темпами. Например, в 1965 г. валовая продукция всей отрасли промышленности в Западной Сибири возросла в 14 раз, в Восточной Сибири—в 9.5 и на Дальнем Востоке—в 6.5 раз по сравнению с 1940 г.

Сибири станет одной из основных промышленных баз в перспективе. В настоящее время здесь уже развернулись грандиозные строительства. Большое внимание автор уделяет тем богатейшим возможностям, включающимся в среде Сибири.